

# 演劇ワークショップの実践報告-「10分間ストーリーをポルトホールで本格的に上演しよう!」の実施-

著者	村松 幹男, 森井 綾, 岡元 眞理子, 田 光子, 平井 伸之, 森 一生, 大林 のり子, 永田 靖, 堀田 充規, 金田一 仁志
雑誌名	北翔大学北方圏学術情報センター年報
巻	6
ページ	145-153
発行年	2014
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001367/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001367/</a>

## 研究報告

## 演劇ワークショップの実践報告

## ー「10分間ストーリーをポルトホールで本格的に上演しよう！」の実施ー

村松 幹男<sup>\*1</sup>    森井 綾<sup>\*2</sup>    岡元真理子<sup>\*3</sup>    田 光子<sup>\*4</sup>  
 平井 伸之<sup>\*5</sup>    森 一生<sup>\*6</sup>    大林のり子<sup>\*7</sup>    永田 靖<sup>\*8</sup>  
 堀田 充規<sup>\*9</sup>    金田一仁志<sup>\*10</sup>

※1 ※2 北翔大学生涯学習システム学部芸術メディア学科    ※3 北翔大学生涯学習システム学部学習コーチング学科

※4 ※5 北翔大学短期大学部ライフデザイン学科    ※6 北翔大学非常勤講師    ※7 明治大学文学部文学科

※8 大阪大学文学研究科    ※9 大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科    ※10 株式会社バクス

## 抄 録

北方圏学術情報センターポルトにおける研究授業成果の一つとして行った高校生向け演劇ワークショップの実践報告を行う。

キーワード：演劇，ワークショップ

## I. は じ め に

舞台芸術研究グループは、「舞台芸術創造の方法論を活用した地域貢献に関する臨床研究」を研究課題として行ってきた。その基盤研究として、地域に関わる①演劇教育や文化振興に関する研究、②芸術活動に関する研究、③資料収集および臨床研究授業・ワークショップ（WS）等の実施、④「舞台芸術通信 PROBE」発行や「附属劇団」の活動を通して、研究活動のアウトリーチを図り、舞台芸術に関わる組織や人材との提携、情報交換・提供の推進を掲げている。私たちは①及び②を視野に入れつつ、③の臨床研究授業を通して舞台芸術製作の方法論がコミュニケーション能力やコラボレーション能力を高める方法論として有効であることを検証しつつ、舞台芸術の実務者や指導者育成に資する教育方法論やワークショップ方法論の構築、そしてそのアウトリーチの実践を目的として活動してきた。

本報告は、上記の活動の一つとして2013年12月に高校生を対象に行われた演劇ワークショップの実践報告である。

## II. 演劇ワークショップモデル

「イベント指向型教育の有効性Ⅲ」（生涯学習システム学部研究紀要第11号）<sup>注1)</sup>において、私たちは、演劇

ワークショップモデルを提案した。以下に引用しよう。

（前略）その一つのモデルとして、我々は「5分間ストーリー」を行っている。（中略）

まったくの初心者を対象とした場合、「5分間ストーリー」におけるモデルにかかる時間は、

- ①舞台機構の説明・安全講習：1時間～2時間
- ②チームビルディング（アイスブレイキングやインプロヴィゼーション）：1時間～3時間
- ③役割分担（チーム分け、役割の分担）：1時間
- ④本読み：1時間～3時間
- ⑤基本的な照明技術講習：最低でも3時間
- ⑥基本的な音響技術講習：最低でも3時間
- ⑦稽古、照明や音響のプランニング：最低でも3時間  
→これは、スタッフの手助けが絶対に必要になる。
- ⑧仕込み：最低でも3時間
- ⑨テクニカルリハーサル：最低でも1時間
- ⑩本番・振り返り：最低でも1時間
- ⑪撤去：1時間

ここに記しただけでも、最低で19時間は必要である。しかも、⑤、⑥は、本当に基本的な説明しかできないし、⑦、⑧は十分な時間を取ったとはとても言えず、相当範囲を担当スタッフの力を借りずにはできないであろう。初心者ほど⑨は重要で時間をかけるべきであるし、①～⑪のそれぞれの場面で振り返り等を行えば、もっともっと時間は必要になる。

それでも無理を承知の上で、劇場を使った3日間ワーク

ショップ（9時から12時、13時～17時）を構想することはできる。

- 1日目 午前①と②と③ 午後④と⑤  
2日目 午前②と⑥ 午後⑦  
3日目 午前⑧ 午後⑨と⑩と⑪  
(後略)

### Ⅲ. 今回のワークショップについて

#### 1. 概要

今回は、高校演劇部の生徒を対象とし、「10分間ストーリーをポルトホールで本格的に上演しよう！」というタイトルでワークショップを実施した。「演劇をちょっと本格的に学びたいと考えている演劇部の生徒を対象に、北翔舞台芸術がワークショップを開催します」と銘打って、演劇初心者ではない生徒を対象に行った。

役者希望者対象として4日間、10時間のワークショップ（実質11時間。稽古3日間。1日目2時間、2日目4時間、3日目2時間。本番日はワークショップ、客入れ、本番、終了後ワークショップを含めて3時間）を行い、定員を20名程度とした。10分程の芝居を予定していたので、7名～8名を限度として、実際の上演は2～3チームに分かれて行う計画であった。

照明・音響希望者は1日間。公演当日に早めに来てもらって設備の紹介、当日行われる照明プランの提示、終了後のワークショップで照明や・音響について学んでもらおうという計画であった。

役者希望者対象のワークショップでは、実際には16名の生徒が応募。2チームに分かれて上演することになった。

人数が確定してから、台本を作成しはじめた。また、当日事情で休んでしまう参加者を想定して、学生の手伝いを2～3名（日によって異なる）置いた。

#### 2. ワークショップの意図

今回のワークショップの意図を当日の挨拶から引用する。

「(前略) 北翔舞台芸術演劇ワークショップを『10分間ストーリーをポルトホールで本格的に上演しよう!』と銘打ちまして初めて開催いたします。

役者は、今日を含めず8時間の稽古をしてまいりました。役を演じるとはどういうことか、脚本を読むとはどういうことかということをベースに、今回は、「場をつくる」というテーマで稽古をしてきました。

主催：北翔舞台芸術（北翔大学 芸術メディア学科舞台芸術コース&北翔大学短期大学部ライオンデザイン学科ファッション舞台アートコース）  
北翔大学北方圏芸術情報センターポルト 舞台芸術研究グループ

**北翔舞台芸術 演劇のワークショップ**  
**「10分間ストーリーをポルトホールで本格的に上演しよう!」**

演劇をちょっと本格的に学びたいと考えている演劇部の生徒を対象に、北翔舞台芸術がワークショップを開催します。

**演劇をもっと学びたいと考えている高校演劇部生徒**

**役者希望者対象（4日間 申込みが必要です）**  
10分間ぐらいのショートストーリーを利用して、脚本を読むとはどういうことか、演じるとはどういうことかを学ぶ4日間10時間のワークショップ（稽古3日間、本番1日）。最終日にはポルトホールの設備をフルに使って本格的に上演します。  
**定員20名程度**、2～3チームに分かれて上演します。  
(5名未満の場合は中止になる場合があります。また、定員になり次第締め切らせてもらいます。申込み締切は12月7日土曜日です。)  
※本日上演をめざしますので、4日間とも参加できることが条件です。特別な事情がある場合は事前にご相談ください。

**照明・音響希望者対象（1日間 申込みが必要です）**  
照明・音響プランの立て方について学びます。その後本番の公演（ワークショップ最終日）を観てもらい、終了後のワークショップで照明設備・音響設備と芝居についていろいろと学んでもらいます。定員15名程度。締切は12月7日（土曜日）です。

**最終日の観劇及び観劇後のワークショップは、演劇に興味ある生徒なら誰でも参加OKです!（申込みは不要です。開場18:00 開演18:15）**

**日程**  
スケジュール  
12/12（木） 17:00～19:00＜役者希望者＞  
（アイスブレイキング、脚本提示など）  
12/14（土） 14:00～18:00＜役者希望者＞  
12/18（水） 17:00～19:00＜役者希望者＞  
12/19（木） 16:30～＜役者希望者／照明・音響希望者＞  
16:30～18:00＜役者希望者＞稽古・グネプロ  
16:30～18:00＜照明・音響希望者＞照明・音響プランの立て方  
18:00 開場  
18:15～18:45 上演（チーム数によって異なります）  
18:45～19:30 発表をもちにした劇つくりワークショップ

**講師**  
森 一生【演出家 北翔大学非常勤講師 ポルト研究員】  
鈴木静也【照明家 北翔大学非常勤講師】 ポルト研究員  
村松利男、平井伸之、田光子【北翔舞台芸術】

**場所**  
北翔大学北方圏芸術情報センター ポルト  
札幌市中央区南1条西22丁目  
地下鉄東西線西18丁目駅下車1番出口 徒歩5分

**申込み**  
「役者希望者対象」及び「照明・音響希望者対象」のワークショップに参加する方は申込みが必要です。北翔大学の村松までメールで申込みをお願いします。  
muramatsu@hokusho-u.ac.jp  
メールには、件名に「ワークショップ希望（役者）」または「ワークショップ希望（照明・音響）」と記し、本文には「高校名」と「氏名」及び「確実に連絡を取ることのできる「メールアドレス（電話番号）」を記載してください。  
【観劇（と終了後のワークショップ）のみ】の希望者は申込みをする必要はありません。

このワークショップは北翔大学短期大学部創立50周年記念ライブデザイン学科連携イベント企画の一環（第2弾）でもあります。

#### ワークショップフライヤー

参加者が決まってから台本を起こしましたので、時間的な制約もあり、実際の上演時間は、13分から14分となります。参加16名が、2チームに分かれて上演します。

ところで、基本的には生徒たちにいろいろ考えてもらおうという主旨でこのワークショップを企画していますので、様々なアドバイスをしましたが、キャラクターや人間関係、場の雰囲気などは台本から読み取ろうということなので、いわゆる演出的な方向づけ、演出的な縛りはおこなっていません。したがって、同じ台本ですが、まったく同じ上演とはなっていませんので、その辺も楽しんでいただけたら幸いです。」

#### 3. 具体的な流れ

具体的な状況は以下ようになる。

##### i) チーム分け

1日目は、最初にチーム分け。ゲームを利用したチーム分けをしようかとも考えたが、時間の都合と台本の男女比、参加高校の人数の関係等々から、名簿をもとにこちら側で先にチーム分けを実施し発表した。

##### ii) アイスブレイキング

その後、アイスブレイキング「オンリーワンよりナンバーワン」を実施。これは、チームに分かれて、そのメ

ンバー同士で「得意なこと」や「自慢できること」などを話し合ってもらい、そのメンバーの中でナンバーワンといえるものを探す。そしてそれを全員の前で発表するという自己紹介用アイスブレイキングである。チームでの話し合いでも、発表の場でも盛り上がり、アイスブレイキングゲームとしては有効であった（元気の演劇部部員であることは差し引かなければならない）。

### iii) 本読み。

アイスブレイキング終了後、台本を提示し、まずは読んでもらった。今回のワークショップでは、この本読みの段階で作者の意図や演出意図等は一切話をしなかった。

### iv) キャスティング

最後にキャスティングを行った。キャスティングはチームで決めてもらうこととし、ここでも話し合いの場を設けるようにした。なかなか決まらなく簡単なオーディションを行ったチームもあった。

### v) 稽古

2日目は、基本的に決定した役のセリフはできるだけ覚えて来るように促していたので、グループに分かれての通し稽古を行った。この段階では、まだ台詞を覚えるというところに主眼がある。

演劇を創り上げていくやり方には様々なやり方がある。よく、まだ役者の台詞が入っていない段階でいろいろ演技指導をしたり、演出的な方向付けを行ったりし、リズムやテンポを重視して、プロンプター（役者に台詞を伝える係り）を置いたりする作り方がある。しかし、私たちは（北翔舞台芸術は）そのような方法論を取らない。まず、役者自身にキャラクターや役同士の関係性、場の状況について考えてもらい、その上で、台詞をでき

るだけ早く入れてもらう。

役者を演出の操り人形とはせずに、一人のアーティストとして考え、演出、スタッフ、役者らのアイディアをぶつけ合うことで、よりよいものにしていくという考え方である。演劇初心者はどうふるまうてよいのか分からないという難点はあるが、その辺は上手くフォローしつつ、役者が“考える”癖をつけさせている。

このワークショップでも、最初から演出的な縛りは行わなかった。まずは生徒同士で話し合ってもらい、どういうキャラクターなのか、登場人物同士の関係性はどうなのかを台本を読むことを通して決めていってもらった。

この時強調したことは、キャラクターの設定や関係性を自由に（勝手に）考えるのではなく、必ず台本から読み取ることが重要であること（台本に証拠がある）、作者の世界観を出来るだけ捉えようとする努力を行うこと、である。

この日は4時間の時間があつたので、チームごとの話し合いの時間、稽古の時間、通しを観てダメ出し（演出による修正点等の指摘）を聞く時間（Aチームが演じているときはBチームが観て、Aチームへのダメだしも聞く）を設けた。この「通しを観てダメ出しを聞く時間」がこのワークショップの核心で、その時間を通して、台本を読むとはどういうことか、場を創るとはどういうことかを考えてもらい、感じてもらった。したがってダメ出しも「こうした方がいい」という指摘より、「なぜ、そう演じたのか」とか「台本では〇〇と言っているが、なぜそう言ったのか。なぜ××という台詞にならなかったと思うか」、「△△との関係はどういう関係なのか？（生徒の答えに対して）。それは台本のどこから言えることなのか」というように、質問を投げかけるようなダメ出しが多くなる。

3日目は、2日目と同様に通しを観て、ダメ出しをす



ワークショップ2日目



ワークショップ3日目



上演後のワークショップ

るという形を取り、翌日の本番に向けての最終稽古を行った。衣装合わせや小道具の確認なども行った。

4日目は本番。今回は平日だったので、舞台の仕込みは朝からこちら（北翔舞台芸術）で行った。

#### vi) テクニカルリハーサル、ゲネプロ

ワークショップ参加者は開場の1時間半前に集合し打ち合わせ終了後、実際の舞台上で簡単なテクニカルリハーサルを行った。その後、ゲネプロ（総リハーサル）を行い、最終調整を行った。

#### vii) 照明・音響ワークショップ

2チームの発表を終えた後、観劇を元にした照明・音響中心のワークショップを開催した。

音響に関してはスピーカー等の置き位置とその意図、ト書きの指定とその解釈等について。照明についても使用した台数等の簡単な説明の後、「リアルな照明」、「感情表現としての照明」、「その他の効果としての照明」について説明した。その後、実際のシーンを生徒たちに演じてもらいながら、照明や音響を変えて来場者に観てもらい、演出意図によって表現が変わること、演劇における表現の多様性について感じてもらった。

#### 4. ワークショップモデルとの関係性

今回のワークショップでは、照明・音響のプランニングや技術講習の部分を省略して行い、仕込みや撤収もこちら側で行った。そこで、以下のような時間配分となった。

##### ①舞台機構の説明・安全講習：1時間～2時間

今回はホール使用が最終日のみだったことと、参加者が演劇初心者ではなかったので簡単に済ませた。最終日

に15分程度。

##### ②チームビルディング（アイスブレイキングやインプロヴィゼーション）：1時間～3時間

今回は1時間程の時間を当てた（ii）。

##### ③役割分担（チーム分け、役割の分担）：1時間

##### ④本読み：1時間～2時間

これら2点に関しては初日に1時間程度時間をとった（i）（iii）（iv）。

##### ⑤基本的な照明技術講習：最低でも3時間

##### ⑥基本的な音響技術講習：最低でも3時間

この2点に関しては、今回省略。

##### ⑦稽古、照明や音響のプランニング：最低でも3時間

稽古として、2日目、3日目合わせて6時間ほど実施（v）。

##### ⑧仕込み：最低でも3時間

仕込みはこちら側で行ったので省略。

##### ⑨テクニカルリハーサル：最低でも1時間

最終日に1時間。（vi）

##### ⑩本番・振り返り：最低でも1時間

本番発表後、ワークショップとして1時間余り（vii）。

##### ⑪撤去：1時間

今回はこちら側で行ったので省略。  
となる。

## IV. 演劇ワークショップに関する振り返り

演劇ワークショップを開催するとき、「技術的」側面と「演劇表現的」側面のどちらに比重を置くのが、重要になる。

今回のワークショップは役者として、「台本を読むということは」、「場をつくるということは」に主眼を置いて行った。これらは発声法やセリフ術のような「技術的」側面ではなく、「演劇表現的」側面であると考えている。この側面の能力を養成するには、実際に公開上演することが有効である。なぜなら、演劇表現は非常に多様であり、すべての芸術表現がそうであるように、正解が一つあるという世界ではない。そのような芸術の特殊性を鑑みれば、『演劇表現的』側面を養成するには、参加者が自ら考え、話し合い、そして実践し、その成果を（プロフェッショナルの支援を受けつつ）公表し、観客の評価を受けたり自己評価したりすることを繰り返すことが肝要であると考えからである。異論があるかもしれないが、芸術表現はあくまでも発表されて初めて完結するものである。

今回は、役者に対するワークショップが主となった。10分程度の演劇とはいえ、時間の足りなさを感じた。少

なくとも土日を利用して、もう4～5時間欲しかった。そのことは、ワークショップの最後の方の挨拶でも述べたので引用しよう。

「さて、いかがでしたでしょうか。本格的に公開上演しようという目的があったために、実際のワークショップでは、基本的な、といいますか、総括的な、といいますか、つまり抽象的なアドバイスが多くなり、あまり具体的なアドバイスにまで踏み込めなかったのは我々の反省として残っています。それでも、参加してくれた生徒たちに少しでも何かをつかんでもらえたら・・・と思っています」

もう4～5時間あれば（もちろん、より多くの時間が取れるに越したことはない）、もう少し具体的なアドバイスに踏み込むことができただろう。

今回は出来なかったが、照明・音響・美術装置等のスタッフ養成に関しても同様であると考えている。しかも現在、照明・音響・装置美術等のスタッフについては、「技術的」能力はあるものの、「演劇表現」を行えるスタッフが不足している<sup>注2)</sup>。「演劇表現」を行うには、台本に関する理解力や演出意図の把握力、創られる場への感覚等々の能力が必要であり、それなりの経験が必要になる。

それらの能力を養成するには、役者と同様に、実際に上演して観客の評価を受けたり自己評価を行ったりすることを繰り返すことが重要である。

今回は、1日目（チーム分け、キャスティング：2時間）、2日目（稽古：4時間）、3日目（稽古：2時間）であった。照明・音響のワークショップも合同にするなら、2日目の後にもう一日4時間ぐらいの稽古を置くのがいいだろう。そうすれば、2日目のワークショップで技術講習を行い、3日目は稽古に参加、4日目（今回の2日目に相当）にプラン作成、最終調整・・・ができる。

そして、当日は仕込みから参加して撤収（バラシ）で終わることができれば、より充実したワークショップとなるだろう。

## V. ま と め

10分程度の台本を元に、本格的に上演するというワークショップの試みは、ホールを有する大学だから可能と言えるワークショップである。このワークショップモデルを改善して行き、ホールを有する自治体で利用してもらい、最終的にはその地域への貢献の一助になればと考えている。

また、「演劇表現」を行えるスタッフ育成の一つの方法論としても機能するように、演劇ワークショップを充

実させ、実践して行きたいと考えている。

## 付記

この研究報告は、平成25年度北方圏学術情報センターの助成を受けて行われている。

注1) 村松幹男：「イベント指向型教育の有効性 Ⅲ ～ワークショップモデル～」，北翔大学生涯学習システム学部研究紀要，第11号，P19（2011）

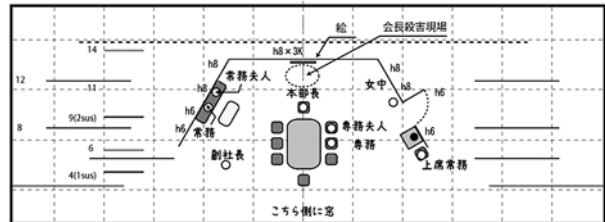
注2) 村松幹男，平井伸之：「イベント指向型教育」の取り組みについて，北翔大学北方圏学術情報センター年報，vol 4，P139（2012）

## 参考：ワークショップ上演台本

館にて・・・

登場人物・・・※印の性別は男でも女でも良い。語尾等を代えて欲しい。

副社長	※女	専務	男
専務夫人	女	上席常務	※女
常務	※男	常務夫人	女
本部長	※女	女中	※女



舞台平面図

舞台は、人里離れた山奥深くに建てられた古びた洋館の一室である。とある成長企業の会長兼社長の別荘という設定である。この企業は会長兼社長は高齢であるが、他の者はまだ若く、急成長している会社という設定だ（なお、企業の役職の高い順は、副社長，専務，上席常務，常務，本部長である）。舞台中央に楕円形の大きなテーブルが縦に置かれている。下手側にソファ。上手側にはドアが一つある。その横にサイドテーブル。サイドテーブルの上には古びた電話機。客席側に窓がある設定である。

※今回のワークショップでは壁を立てず、暗幕で処理するかもしれない。

暗転の中、テーマ曲が聞こえてくる。

テーマ曲とクロスするように、激しい雷雨。嵐の音。それらの音が弱まって・・・

静寂。

微かに聞こえる遠雷。

溶明すると、7名の人間が一室に集まっている姿が浮かび上がる。

夜。

静まりかえった部屋の中に、副社長が入ってくる。

副社長 遅れたかしら。

本部長 いえ、副社長。・・・でもこれで全員揃いました。

副社長 一体、みんなを集めてどうしようというの？

本部長 状況は分かっていると思います。

副社長 だから？

本部長 私たちにできることは可能な限りしようと。

常務 何をしようと言うんだ？

本部長 常務、考えても見てください。この山奥の山荘で殺人事件が起きた。しかも、昨夜来の嵐で、ここは陸の孤島と化してしまった。だから・・・

副社長 ちょっと待って。なぜ、本部長のあなたが仕切るの？

本部長 じゃあ、あなたが仕切りますか、副社長。

専務夫人 誰が仕切ったっていいじゃないの。

専務 (専務夫人に) おまえ、言葉を慎みなさい。

常務夫人 仕切るって、・・・こ、これから何を始めようというの？

常務 君は黙っていなさい。

常務夫人 だって、あなた・・・

上席常務 あ、あの。お、教えてちょうだい。し、死体は、か、会長の、会長の死体はどこにやったの？

女中 寝室に運びました。

上席常務 は、運んだって、そ、そんな・・・

副社長 警察が来る前に、移動させていいの？現場を動かすなんて・・・

専務夫人 一体、いつ警察が来るというのよ。

専務 (専務夫人に) おまえ！

上席常務 た、確かに専務夫人の言うとおりでけど・・・

常務夫人 し、仕方がないと思います。ずっとここに（会長の殺害現場を指さして）死体を置いておくなんて、私、とても我慢できない。

常務 (常務夫人に) 少し、落ち着くんだ。

専務 副社長、私もやむを得ない処置かと思っています。町に通じる唯一の山道は崖崩れで通れず、電話もつながらないのですから。

副社長 ・・・ええ、まあ、確かに。

本部長 詳細な写真は撮りました。凶器になるようなものは発見されていません。

常務夫人 ああ、恐ろしい。

副社長 状況からすると、会長はこの絵を見ているときに後

ろから何か鈍器のようなもので、後頭部を殴られた・・・。

常務 ええ。そんな感じでした。間違いないでしょう。

上席常務 一体誰がそんな恐ろしいことを・・・。

遠雷。

専務夫人 また、雷。やっとながが去ったと思ったのに。

女中 このこの時期の天気は不安定です。また嵐になるかも・・・。

常務 くそ。こんな時に。

雷。少し近づいている。

常務夫人 近くなったわ。

女中 嵐の前触れです。これから風も吹いてくるでしょう。

上席常務 また、嵐・・・。

本部長 そう、また嵐がやってくるのかもしれない。つまり・・・、私たちはみな、この館に足止めを食っている。

専務 ここから町へは誰もいけない。町から誰も来られない。それどころか、この世の誰も、我々8名がここで孤立していることを知らないだろう。

専務夫人 芝居がかった言い方はやめて。

本部長 でも、専務夫人、事実、専務のおっしゃる通りなんです。

専務夫人 本当に孤立しているの？

常務夫人 間違いないわ。ねえ、あなた。

常務 (夫人に) ああ。(みんなに)・・・先ほど専務がおっしゃったとおり、町とつながる一本道は、崖が崩れて通ることはできませんでした。

上席常務 偶然なの？本当に偶然なの？

常務夫人 誰かが故意にやったとおっしゃるんですか！（常務に) あ、あなた・・・

常務 故意にやるわけないだろう。偶然の一致さ。

女中 確かに昨夜来の雨は尋常じゃありませんでした。地盤が緩んで崖が崩れても不思議ではありません。過去にそういうことがなかった訳ではありません。

副社長 ったく。こんな、山奥に別荘を建てることもないでしょうに。

常務 とにかく、私たちはやむなく引き返してきたのです。復旧には時間がかかりますよ。激しく崩れていたから、歩いて行こうとしたって、岩山を上るような感じだ。

本部長 常務。なぜ、私たちに黙ってここ出たのです？

副社長 私が頼んだのよ。

本部長 副社長が？

副社長 連絡が取れないのだから、車で町まで行ってもらおうと思ったのよ。悪かったかしら？

専務 (副社長に) こんな嵐の中を。危険すぎると思わなかったのですか？

常務 でも、専務。緊急事態なので、私も何とかしようと決死の覚悟で・・・

専務夫人 夫人まで連れて？

常務夫人 わ、わたし、こんなところに一人で居たくなかったモノですから。主人に頼んだんです。

専務夫人 私たちが居るじゃない。

常務夫人 で、でも、殺人事件が起きたんですよ！

常務 (夫人に) 落ち着くんだ。

常務夫人 え、ええ。

副社長 とにかく、お陰で私たちが孤立していることだけは確認できたわ。

常務 それは間違いありません。

本部長 間違いないでしょう。・・・そんな中で殺人事件が起きたのです。

専務 しかも、頼みの綱の電話は、誰かによって線が切られていた。

上席常務 携帯は元々つながらないし・・・

専務夫人 本当に誰かが電話の線を切ったの？前から切れていたらじゃないの？

女中 いいえ。昨日の朝は電話がつながりました。

本部長 間違いなく誰かが、切断したのです。

(間) 雷。

上席常務 いったい、誰の仕業？

専務 誰の仕業？上席常務。そう言うあなたかもしれない。

上席常務 ば、馬鹿なことは言わないでください！

本部長 (専務に) あなたなのでは？

専務 (本部長に) そう言う君じゃないのか。

常務夫人 やめてよ！

常務 落ち着きなさい。(専務たちに) あなた方もやめてください。

本部長 しかし、一つだけ確かなことがあるのです。

専務 ああ。・・・この中の誰かが、会長を殺した。

専務夫人 それだけは間違いない。

本部長 その通りです。

(間) 雷。風の音。

上席常務 か、風が出てきた。

本部長 (女中に) ねえ、コーヒーでも炒れてくれないかし

ら。

女中 かしこまりました(はけようとする)

専務夫人 こんな時にコーヒー。

常務 酒でも飲みたいぐらいだ。

専務 ああ。少しぐらいなら、いいんじゃないか？いいだろう、本部長。

本部長 ええ、構いませんとも。

専務 じゃあ、私にはスコッチの水割りを。(夫人に) おまえは？

専務夫人 何もいらない。いえ、そうね、お水をちょうだい。

女中 かしこまりました。

専務 副社長はどうします？

副社長 そうね・・・。じゃあ、私もスコッチを。

女中 かしこまりました。

常務 私にも。そして妻のために、ブランディーを頼む。

女中 かしこまりました。・・・上席常務はいかがなさいますか？

上席常務 コーヒーでいいわ。・・・いえ、やはりスコッチの水割りを。

女中 かしこまりました(はける)。

(間) 風の音が強くなる。

副社長 本部長。本当にこの中の誰かが殺したと思っているの？一体、誰が会長を殺そうなんて思うの？第一ここにいるのは我が社を支える最高幹部じゃないの。

本部長 あなたらしい言い方だ。ここははっきりさせましょう。ここにいるみんなには、それぞれ会長を殺す動機がある。

副社長 馬鹿なことを言わないで。。

常務夫人 そんな、恐ろしい。ねえ、あなた。

常務 ああ。(本部長に) いったい君は何の根拠があってそんなことを言うんだ？

専務夫人 おとほけはよしてちょうだい。

専務 (専務夫人に) おまえ！

本部長 専務夫人に賛成です。とほけるのもいい加減にした方がいい。実際に殺人事件が起きているのですから。

専務 どういう意味だ？

本部長 みなさんも十分にご存じでしょう。殺された会長は、我が社のいわばスポンサーだった。スポンサーに過ぎなかった、そうでしょう？この会社は、あなたの、専務の特許製品で爆発的に成長したのだから。

副社長 ふん。

専務 事実だろう。

副社長 でもね、あなたは経営のド素人。私が会社を回しているんでしょう？

本部長 その通り！製品化に当たって金を出したのが会長兼



社長。そして高齢の会長が会社の経営を実質的に任せるために呼んだのが副社長、あなただ。常務は副社長の忠実なる部下としてこの会社にやってきた。

常務 随分とげのある言い方じゃないか。

常務夫人 あなた・・・。

本部長 こんな状況ですからね、言葉を選んでいる暇はありません。事実を述べただけです。

常務 つけあがるな！

常務夫人 あ、あなた。

副社長 常務、落ち着いて。

本部長 失礼はお許してください。さて、この会社が起きる前から、専務とともに研究開発を行ってきたのが上席常務、あなただ。

上席常務 ええ・・・

副社長 何を言いたいわけ？ふん。随分短絡な発想じゃない。会長が死ねば、私がこの会社を独占できるとも言いたいわけ？

常務 そしてこの私は副社長のもと、会社のナンバー２になれると言いたいのか？

専務 本部長。君は、私が特許製品で会社が大きくなっているのに待遇が悪すぎると思っていると考えているわけだな。この私がそのことで会長に恨みを持って殺したと。

本部長 可能性は否定できない。

専務 ふん。安っぽいドラマの見過ぎだ。

上席常務 わ、わたしには動機がありません。だ、だって、今の地位で十分なんですもの。いえ、荷が重すぎるぐらい。会長には十分に感謝しているわ。

専務夫人 一人でいい子にならないで。

上席常務 そ、そんな。本心です。

専務夫人 あんたの猫っかぶりには我慢ならないのよ！

専務 （専務夫人を遮って）おまえ。

上席常務 本当なんです。

専務 本部長、君はどうなんだ？君に動機がないとは言わせないぞ。

副社長 そう。あなたは、この会社にとっては会長が連れてきた新参者。実際は会長に取り入って、この会社を乗っ取ろうという腹なんじゃないの？

本部長 どうでしょう。いずれにせよ、会長は殺された。そして、状況から判断して間違いなく、この中の誰かが殺した。そうでしょう？

上席常務 そ、そんな、そんな恐ろしい・・・

常務夫人 ねえ、あなた、本当にそうなの？この中の誰かが殺したの？

常務 落ち着きなさい。

常務夫人 私、もう耐えられない。(みんなに) お願いします。部屋で休ませてください。

常務 ああ、少し休んだ方がいい。(みんなに) 妻は繊細な女なんです。例え茶番と分かっているけど、妻には耐えられないでしょう。部屋で休ませてもらいます。

本部長 駄目です。

常務 何？

本部長 だって、考えても見てください。この中の誰かが会長を殺したんですよ。しかも当てが外れたことに、外部の不審者の犯行にできない状況になってしまったんです。予定外の嵐のせいで。だから・・・

常務夫人 だから？

上席常務 だ、だから、みんなで顔を合わせている必要があると言いたいよね？それぞれを監視し合うために。

副社長 監視し合うために？

本部長 そうです。だって、もしかしたら・・・

常務 もしかしたら、なんなんだ。

専務夫人 第２，第３の殺人が起こりうると。

副社長 な、なんですって！

激しい雷鳴。部屋の電気が消える。

上席常務 て、停電？

雨の音。

(間) 丁度、女中がコーヒーなどを運んでくる。

女中 ご安心ください。直ぐに自家発電による非常照明に変わります。

非常照明に変わる。

「自家発電に切り替わりました」というスピーカーからの声。

女中はコーヒーやお酒をテーブルの上にセッティングしはじめる。

上席常務 な、なんなの、今の。

女中 セキュリティシステムからの報告です。今はセキュリティシステムを作動させています。

副社長 いつも作動させている訳じゃないの？

女中 ええ。昼間は解除しています。夜には必ず作動させますが。ですから、無断で誰かが入ったり出ていたりすると、警報がなります。

専務 昨夜もそうになっていたのか？

女中 はい。

常務 会長が殺害されたのは、今日の昼前。昨日の夜から外は暴風雨だった。もし朝方誰かが外部から侵入したのなら、それなりの跡は残ったはずだ。

女中 確かに社長の周りにそのような水たまりや泥の跡は

ありませんでした。・・・それに、(常務に)あなたが戻られてから、本部長に言われてセキュリティシステムを作動させています。

本部長 誰かが出入りすれば警報はなる。今のところ、警報は発せられていない。

副社長 必然的に、この中の誰かが犯人である可能性は十分に高いというのね？

専務夫人 外部侵入者がこの館のどこかに隠れ潜んでいる可能性は否定できないわ。

専務 ああ。ゼロとは言えないな。いずれにせよ、我々の安全を確保するためにも、第2・第3の殺人事件を防ぐためにも、みんなで一緒に居た方がいいというわけだ。

本部長 そうです。

常務 また殺人が行われる・・・か。

専務夫人 わ、わたし耐えられないわ。

女中が、飲み物のセッティングを終わらせる。

本部長 さあ、みなさん。まずは席にお着きください。

みんな、席に着く。

副社長 (本部長に)そこは、会長の席よ。

本部長 失礼(移動しようとする)。

専務夫人 そこにいて！・・・そこにいて欲しい。

副社長 ・・・、まあ、いいでしょう。

本部長 それでは、ここに。・・・さあ、みなさん、どうぞお飲みください。

何となく、間が悪い。

本部長 乾杯でもしますか？

副社長 不謹慎よ。

本部長 失礼。でも、そうでもしなければ、みなさん、お飲みにならないから・・・。

専務、飲もうと手を伸ばし、ふと不安になる。その不安が他の者に伝わる(毒でも入っているのではないかと思っただけ)。互いに牽制しあう雰囲気。本部長だけが、コーヒーを飲む。

本部長 さて、と。・・・さあ、みなさん。これからが本番です。昼前のみなさんのアリバイを確認しなければなりません。

常務 アリバイと来たか。

と、犬の鳴き声。

女中 ジョン？

犬の鳴き声がうなり声に変わる。

専務夫人 誰かいる！

と、警報が鳴り響く。みんな驚いて立ち上がる。

ゆっくりと暗転。

つづく・・・？